

平成23年度 第3回芦屋市立中学校の昼食の在り方を考える懇話会 会議録

日時 平成24年1月19日(木) 10:00~12:00

場所 芦屋市役所北館4階 教育委員会室

出席者

委員長 河合 優年
副委員長 増澤 康男
委員 笠原 清次
長谷川 則光
平岡 栄
氏原 佳代子
中塚 巳津子
堂脇 里真
入江 祝栄
片岡 登志子

教育委員会事務局

波多野 正和
丹下 秀夫
北野 章
西尾 節子
俵原 正仁
長谷川 真弓

会議の公表 ■公開

傍聴者数 12人

1 議 事

- (1) アンケート調査の結果（クロス集計など）について
- (2) 実施に係る課題について

2 内 容

＝開 会＝

管理部長 挨拶

今回は、資料として、アンケートのクロス集計結果と個別のご意見を出しています。それらを踏まえながら、中学校での望ましい昼食のあり方について、忌憚のないご意見をお願いいたします。

＝議 事＝

- (1) 事務局より、資料の確認の後、資料に沿って趣旨説明をおこなう

資料1 第2回議事録要旨

資料2 中学校の昼食を考えるためのアンケート単純集計比較表

資料3 中学校の昼食を考えるためのアンケートクロス集計

資料4 中学校の昼食を考えるためのアンケート自由筆記

(2) 給食を実施するとしたらどれくらい費用がかかるのか

事務局/北野：前回の懇話会で、給食を実施する場合、どれくらい費用がかかるのかというお尋ねがありましたので、お答えします。

自校方式で実施する場合、初期投資として約9億円、ランニングコストとして年1億2千万円かかります。ただ、一番の課題は費用ではなく、調理場を作るためのスペースです。校舎の建て替えも含めて考えていかないとはいけません。

センター方式の場合、各学校に配膳室を作り、保冷庫などの整備をしなければいけません。この費用に3中学で2千万円ほどかかります。センター方式の場合も、難しいのが、センターをどこに作るかということです。センター用の土地は、工場用地の扱いになりますので、今の芦屋市に作る場所はありません。その土地を市外に求めていくのかなど課題が残ります。

親子方式では、今の小学校の調理場を拡大することになります。調理場が校舎と別棟である場合は、すぐ改築にも取り掛かれるのですが、校舎の中に調理場がある場合、校舎自体を改築しなければいけません。この点をクリアできれば、ランニングコストは、他の方式に比べて安くなります。

デリバリー方式は、姫路が行っていますので、問い合わせしてみたところ、生徒一人当たり300円徴収し、それにプラスして市が235円補助をしています。これで計算してみますと、3中学校で6千数百万円ほどになります。近隣の業者の実態は、自社のメニューでの配送はあるものの学校の要望にあわせて作ってくれるところはありません。この方式をおこなうためには、遠方の業者にも当たってみる必要があります。

河合委員長：センター方式の2千万円は何にかかるものですか。

事務局/北野：配膳庫や保冷庫、食器などの費用です。3つの中学校で2千万円ということになります。ただし、これには、部屋を作る費用は入っていません。

増澤副委員長：センター自体を作る費用はいくらですか？どこの土地に建てるかによっても変わってくると思いますが。

事務局/北野：まだ試算していませんので、次回までに調べておきます。

(3) 懇話会に期待されていることの確認

河合委員長：この懇話会は、名前のおり、様々な立場から中学生にとって望ましい昼食の在り方について議論する場として設置されたものと理解しています。この立場からも、給食を導入すべきであるとか、するべきではない、というような単純な結論だけを導くのではなく、想定される可能性や課題についてしっかりと議論をつくり、確認をしながら、芦屋の中学生の昼食をどのように進めるべきか、その方向性を報告として示していくことが、この懇話会の役割であると考えています。

そこで、想定される課題をはっきりさせていく必要があります。導入するにしても、覚悟がいります。導入しないにしても覚悟がいります。それだけの覚悟を教育委員会、議会、首長も理解して、全国が「芦屋にならえ」と言われるぐらいのものをつくって

きましょう。

懇話会の予定は、当初4回でしたが、万が一のことを考えて会を増やしていただきたい。そこは、フレキシブルにしてほしいと思っています。

具体的な昼食のやり方をまとめていき、その論点を整理していきます。そのためにも、宝塚市や三木市などに視察に行ったわけですので、そこで感じたことや思いをここで出してください。これまでの実査や調査結果もふまえて、懇話会としての意見の整理を始めたいと思っています。想定される可能性を考えて、まとめて、報告書にのせていきます。

今回は、中学校給食を導入に伴う問題点を話し合っていきます。中学生の保護者や一般市民の給食導入賛成が70%を越えているということは、無視できません。そのことを踏まえて、仮に、導入したらどうなのかという発言をしてください。また、この懇話会以外において提出されている動向についても委員の意見として陳述することは、特に妨げません。

観点ですが、4つあります。

- 1 仮に導入をした場合、することによって伴うプラスの側面（効果）
- 2 仮に導入をした場合、することによって伴うマイナスの側面（効果）
- 3 仮に導入をした場合、することによって伴う波及効果
- 4 将来起こるかもしれない外乱要因

3の波及効果というのは、給食をきっかけにして、子どもたちのことを考えていこうということです。「子どもを育てる」というのは学校の問題だけではないということを、給食をきっかけに家庭・地域・市民にむかって、発信していけるかもしれせん。学校教育、家庭教育の改革のチャンスです。

4の外乱要因については、現時点では特に問題とはならないけれど、予期せぬことが出てくるかもしれません。想像できることがあれば出してください。

三木市では、24回の審議の後に、給食を導入しています。私たちは、数回で結論を出すという拙速をしてはいけません。私たちが出したものを元にさらに議論をしていただければと考えています。

増澤副委員長：クロス集計の数字だけをみるのではなく、その数字の裏を見ていかなければいけません。数字の裏に隠れている内容や根拠を考えていくということです。70%には意味があるのですが、この数字だけでは、何を考えているのかは分からない。

このように数字だけだと、質が分かりにくいので、自由記述を重視することになります。今回、事務局が同じような意見をまとめてくださったのですが、逆にこれだと、どれぐらいの人がどの意見を言っているのかがわかりにくくなるので、数を入れてほしいと思います。どれぐらいの人がどのような意見を言っているのか、内容を整理すると70%の裏も分かってきます。説得力も出てきます。

（４） 仮に導入をした場合、することによって伴うプラスの側面（効果）

笠原委員：小学校の例で言いますと、子どもたちが6年間給食を食べ続ける最大のメリットは、私たちが食事をする時に、こういう食べ物を食べていけばいいんだという基本的なことが体験できることだと思います。こういう体験は、栄養バランスや見た目

など生涯にわたって食に関わることをどう考えたらいいのかという基礎的なことにつながっていきます。

片岡委員：私は、市民委員として、給食を実施してほしいという立場で出席しています。請願書署名も集めました。全部で9421人もの署名が集まり、民生文教常任委員会では、全員の可決をいただいて、12月22日の本会議でもお一人の反対のみで、採択されました。民生文教常任委員会の口頭陳述では、お配りした資料にあるように、今現在の母親の働く状況とか、今、子どもがどんな思いでいるか、芦屋市の「食」への意識を高めるためにも、中学校給食を実現させていきたいですという口頭陳述をおこなっていました。他市の方も応援してくださっています。成長期の子どもたちにバランスの取れた給食を是非、実現してほしいと思っています。

河合委員長：もう一度確認しておきますが、「導入するか、しないか」をここで決めてはいけないと考えています。ただ、どちらかの立場に立たないと話が進まないの、まずどちらかの立場から考えていきます。「仮に導入するなら」ということで「導入しない」ということを捨てたわけではありません。

入江委員：芦屋の小学校の給食のレベルの高さに感心しました。なぜ、保護者負担が他市と同じぐらいなのに、このようなレベルの高い給食ができるのかと言うと、全て手作りだからということ、この間の小学校給食の試食会でお聞きました。これは、芦屋市がそれだけ人件費をかけているということです。また、環境ホルモンを考慮した磁器食器も使っています。このように、直接子どもたちの目に触れないところで、芦屋市はお金を使ってくれています。辰巳 芳子さんから伺った話、荒れた中学校で週5回発芽米の給食に変えたところ、荒れが収まったというものがあります。芦屋の学校が落ち着いているのも、小学校の給食のおかげかもしれません。ただ、中学校給食の実施をきっかけにして、今のレベルの小学校給食がなくなることがあってはいけないと思っています。

中塚委員：三木市では、給食に250mlの牛乳が出ていて、大きさにびっくりしたのですが、芦屋市の場合でもパン販売の時に売っている牛乳は250mlでした。ただ、購入している生徒は非常に少ないようで、甘い紅茶やコーヒーが人気だそうです。やはり、毎日ミルクを飲むことは、成長期にはいいことだと思いますし、もし給食があったら、お弁当と違い、苦手な食べ物も、小学校の時のように食べ始めるかもしれませんね。

堂脇委員：「食は、家庭で…」が基本だと思います。「感謝の気持ち」や「食の基礎」「みんなで食べる楽しさ」などは家庭で担っていくものだと考えています。「働いているお母さんが助かるから」というのは、違うと思います。ただ、現実には、いろいろなご家庭があり、そのようなことが味わえない家庭もあります。本来は家庭がやっていくことなのですが、「食」に対する楽しさを味わえない子にとって、給食は大きな意義があると思います。

河合委員長：食環境を整えるチャンスとして、一緒に食べるということは価値があることだと思います。中学生の思春期のこの時期は、社会性、シチズンシップの教育にいい時期です。人と共に喜び、分かち合う大切な時期です。

増澤副委員長：項目としては、アンケートでまとまっていますが、今、みなさんに出し

ていただいたご意見がその代表かなと思います。最後のご意見は大切に、「食育」と言いますと、栄養に偏った話がよく出ますが、ただ栄養を取れば良いといったものではなく、「みんなで食べる、みんなで作る」という体験がとても大切です。これは、本来ならお弁当でもできることです。

中学校の昼食はみんな一緒に食べています。お弁当だと、人と違うものを食べるので、そういう面では、気を使います。給食だと気を使いません。最近、へんに気を使う子が増えています。そういうことは給食では考えなくてもいいわけです。共同して食べられる。みんなで一緒に食べられる。先生も一緒に食べないといけなくなります。このように、みんなと一緒に食べる時間は、人間関係の形成の重要な場になります。それは、弁当も給食も一緒なんですけど、同じものを食べる給食は、そのぶん、気を使わなくていいということになります。

(5) 仮に導入をした場合、することによって伴うマイナスの側面(効果)

河合委員長：次は、マイナスの側面について話していただきます。気をつけないといかないことは、マイナスの側面があるのにもかかわらず、改善なしに導入をすることです。そうならないためにも、導入した場合の課題をあげていただきたい。

長谷川委員：先ほど、プラスの側面が話せませんでしたので、プラスの側面も話させてください。弁当を持ってこられない子とかいつもパンの子とかがいますと、教師はやはり気になります。そういう心配を教師はずっとしているのですが、給食ならそういう心配が一つ減ります。

マイナスの側面についてですが、導入するとなると、質を保証してもらわないと困ります。味も量も小学校給食に負けないものを作ってもらいたいと思っています。一番危惧しているのは、教育課程・時程のことで、三木市の場合、昼休みが10分ほどでした。これでは、5時間目の準備をするぐらいの時間しかないでしょう。今、昼の時間に行われている生徒とのふれあい、ノートを見るなどの時間が持てなくなります。また、誰も図書室を利用していないということも聞きました。今、潮見中学校では、図書館教育に力を入れています。図書室の利用者が増えているだけにどうなるのだろうかという思いがあります。

平岡委員：私もプラスの面から言わせていただきます。中塚委員もおっしゃっていましたが、やはり、お弁当になると、牛乳摂取が減り、カルシウム不足にはなると思います。ただ、給食の場合、個人の食の嗜好のほかに、宗教的なことやアレルギーにも気を使わなければいけません。給食だと、同じものを食べるので気を使わなくていいという話がありましたが、逆にこういうことで、気を使う子もいます。給食では、それが毎日のことになります。視察で見させてもらったのですが、自分の好みの分しか食べていない子がやはりたくさんいました。与えられても、好きなものしか食べないようです。指導の徹底は難しいです。このような生徒は、他の場面でも指導の通りにくい場合が多いものです。言っても聞かない生徒に給食に関する指導もプラスされるわけですから、教師の負担がまた増えるわけです。

入江委員：予算の問題から、小学校の給食のレベルを下げた上で、中学校給食をおこなうというのでは、芦屋市の今までの教育方針に対する矛盾を子ども達に体で体験させ

ることになってしまいます。かといって、多額の借金をしてまで行うというのも、次世代にそのしわ寄せが来るということになります。他の教育事業を縮小という考えもありますが、オープン講座のような今おこなわれている有意義な行事が実施できなくなるようでは困ります。借金を背負うのは子どもたちですので、考慮してほしいと思います。

河合委員長：借金ということではなくて、未来に投資するということに考えてください。本当に必要なものなら、委員会から声を上げていかないといけません。

他のいろいろな計画と照らし合わせて進めていかないと、せっかくお金をかけて作ったものをまた壊してやり直さなければいけないようになります。質のあるものを残していくためにも、二重投資は避けなければいけません。

中塚委員：視察に行った中学校は2校とも上履きでした。上履きと土足の二足制でないと、衛生面からよくありません。芦屋の場合、3中学校とも全て土足なので、その面もクリアしていかなければいけません。宝塚の場合、歴史があるので、給食を運ぶためのリフトエレベーターなどもあったのですが、三木市では、広々とした敷地があるのにもかかわらず、予算の関係で宝塚市のような施設もなく、自校方式ではなく親子方式になっていました。靴箱だけでなく、廊下など全てやり直さないといけないのですが、予算が足りず、手が回らなかったところもあると聞きました。物理的環境をどうするかも考えていかなければいけないと思いました。

笠原委員：6年間学校給食を食べてきた子どもたちが、小学校よりも質の下がった給食が出てきた時、それで大丈夫なのか。これが一番大きな論点になると思います。芦屋の子どもたちは、舌が肥えているように感じます。おいしくないものは、やはり残します。質が大事です。デリバリー方式のメリットはありますが、芦屋市らしい給食が維持できるのかと思っています。偏食の問題もあります。芦屋の小学校給食は、昭和8年に始まったのですが、始めた理由の一つに「偏食のため」というものがありました。偏食のことを考えたメニューなども記録に残っています。実際、小学校の今の偏食指導はよくやっていますが、手間がかかります。中学校でもやらないといけなくなるでしょう。給食を実施することで、中学校に期待するものが大きいと負担も大きくなります。

長谷川委員：山手中学校の場合、今の環境では配膳に関する動線等、非常に難しい問題があります。今の設備のままでは給食実施には困難な点が多いです。安全の面でも、時間確保の面でも、宝塚市のようなリフトエレベーターシステムが必要です。土足禁止の問題や校舎の建替も含めての長期的な見通しがいきます。

河合委員長：芦屋の中長期のプランの中でどう位置づけていくのか。「導入したのはいいけれど・・・」では、困ります。どの時期に、どのようにしていくのか、他のものと連動させていくことが必要です。

増澤副委員長：入れるとすれば、質のいい芦屋らしい給食。これは、譲れない線として出していきたい。

給食を入れるということは、お弁当がなくなるということです。そのことによるデメリットは当然出てくるわけで、そのことも考慮していかなければいけません。例えば、親子コミュニケーションのつながりです。実際お弁当を毎日作ってくれることに

よるつながり、そういうのはなくなっていく。「食事は家庭の役割」という原則はありますが、学校でも責任を持っていかなければいけなくなっているのも確かです。給食かお弁当かどちらかをすれば、どちらかが消ええるわけですから、もしそれによる影響が強く出るとしたら、補えるような形をもう一度考えないといけません。

(6) 仮に導入をした場合、することによって伴う波及効果

河合委員長：「食」というと、すぐに栄養の面だけが注目されがちですが、人間形成、かわりづくりの面も大切にしていかなければいけません。

波及効果として、どれぐらい広げていくことができるのか考えていきましょう。給食だけにぐっと縮めるのではなく、給食をきっかけにして、「地域」「家庭」「人間教育」など、芦屋の教育の未来について考えていきましょう。

増澤副委員長：今日、話を聞いていて、皆さんが、芦屋の小学校給食に誇りを持っていることが分かりました。このことを、子どもたち、保護者、市民はどう考えているのか。また、このことによって、センター方式やデリバリー方式という選択肢はどうなるのか、というようなことも考え続けていかなければいけません。

先ほどの話によると、芦屋市の小学校給食は、昭和8年から市民運動として始まり、今も継続しているとのことですが、それだけの歴史を持っているということです。これは続けていかなければいけません。

最後は、予算の問題になることは確かでしょう。

堂脇委員：アンケートを見てみると、「どんな方式でもいいから導入してほしい」という意見が多く、残念に思いました。とにかく中学校給食が導入されればよいというのではなく、「この方式には、こんなリスクがある。導入すると、これだけのことがある」というような中身も懇話会から発信してほしいと思っています。

河合委員長：芦屋市の給食は、単に歴史的に昭和8年からやっているというだけでなく、そこに意味を持たせて、「歴史」を「伝統」に変えていかないといけません。また、芦屋の教育を聞かれたとき、「芦屋の基礎基本は、人間だ。」と胸をはって言ってほしいという思いが私にはあります。「学力」は、あくまでも必要条件で、そのことは当たり前のことである。さらに、基礎基本としてつけるべき力は「人間」である。「生きる力」「自ら伸びて行く力」を盛った人間が育てば十分条件も満たされるのではないかと考えています。

長谷川委員：教師の多忙化によって、生徒に関わってくる時間が減っています。教育課程が小学校と違うので、小学校でしているから中学校でもできるというわけではありません。今日、給食実施した場合のマイナス面がいろいろと出されましたが、その対応は、結局、学校で対応しなければいけなくなるはずですが、中学校給食が導入されて1年半たった三木市では、給食導入に対して、いまだに厳しい意見を持っている教職員が多いと聞いています。また、芦屋の中学校で行われているいいいな生徒指導などのいい面がなくなっていくのではないかと不安があります。

河合委員長：確かに、中学校給食をしているけれど、快適でないという声はよく聞きます。ただ、芦屋は中学校が3校なので、特区や研究指定を受け、研究をしていけば、そのようなマイナスの面を変えられるかもしれません。変化は動いている現場でしか

できません。

実際に、一度始めたら、やめることはできません。だから、実施することになれば、今、我々が出していったことを一つひとつクリアしていけないといけません。

「歴史」を「伝統」にしていくように、誇りを持って、よく審議していきましょう。食べられさえすればいいんだというスタンスではなく、人生の糧になるものであるというスタンスで。

増澤副委員：とてもいい言葉がたくさん出てきました。いい審議、協議ができたと思います。いい報告書ができそうです。

(5) 今後の日程について

事務局/北野：第4回は、2月15日に予定しています。報告書の骨子を作る事になります。第5回目は、3月ごろをめぐりに調整したいと思っています。

=閉 会=

学校教育部長 挨拶

長時間のご審議ありがとうございました。今日は、「質」という言葉が出ました。「芦屋らしさ」を次の世代につなげることは、大人の責任です。次回以降、「子どもたちをどう育てていくか」「芦屋らしさ」を軸として懇話会が進んでいけばと思っています。

これからも、よろしくお願いします。